

## 倉橋由美子「暗い旅」におけるボーヴォワールの受容：『女ざかり』と比較して

劉，苗苗  
九州大学大学院比較社会文化学府：博士課程

<https://doi.org/10.15017/1654285>

---

出版情報：Comparatio. 19, pp.35-46, 2015-12-28. 九州大学大学院比較社会文化学府比較文化研究会  
バージョン：  
権利関係：

## 倉橋由美子「暗い旅」におけるボーヴォワールの 受容——『女ざかり』と比較して——

劉 苗苗

### 【はじめに】

「暗い旅」は一九六一年一〇月に東都書房から出版された、倉橋由美子はじめの書き下ろし長編小説である。粗筋を辿ると、「あなた」と二人称で呼ばれる主人公が、突然失踪してしまつた婚約者の「かれ」を探し、居場所を失う不安や苦痛などを味わいながら、少女から大人へと成長していく経緯が描かれる。二人称形式の採用や列車に乗り、過去の思い出を通して自己を再認識するといった点において、フランスのアンチ・ロマンの旗手ミシエル・ビュートルの『心変わり』と似通っているため、発表後まもなく、江藤淳にビュートルの「速製模造品」（注一）と批判されたことをきっかけに、「暗い旅」論争が起こり、注目された。しかし従来の研究は形式的な側面を論じたものが多く、物語内容そのものについて触れたものは少ない。

斉藤金司は倉橋自身が言う「幻の城をつくって世界の意味に形をあたえるもの」へわたし自身のなかに深い井戸を掘るもの（注二）という二種類の小説の中で、「暗い旅」を後者に属するものとし、倉橋とその文学を理解するにあたって「鍵をあたえてくれ」、

「彼女の言う第一のK—L型小説への糸口」を「示唆してくれる」（注三）とその重要性を指摘している。また倉橋自身は「作品ノート」において、「若くて生活のない男女が出てきて「純粋」に愛したり愛されたり、「愛」について考察したりする小説、要するにこういうことすべてを愛する人間について書いた小説」（注四）であると「暗い旅」を少女小説として位置づけているため、倉橋の性と愛に関する認識を知るには、「暗い旅」は欠かせない存在であると考えられる。

「暗い旅」（注五）において、ボーヴォワールとサルトルとの関係は繰り返し言及されている。たとえば、「かれとあなたが婚約したところからだつた、あなたがたのあいだにひとつの合言葉が生まれたのは。それは《サルトルとボーヴォワール》という合言葉だつた、恥ずかしいのであなたがたはそれを人まえで口にすることはなかったけれども……ボーヴォワールの自伝を読むまで、あなたがたは二人の関係を想像したり推測したりするだけだつた」（一五八頁）という箇所に見られるように、「あなたがた」がボーヴォワールの自伝を読んだことになっている。

日本で出版されたボーヴォワールの自伝『ある女の回想』は『娘時代』『女ざかり』『或る戦後』『決算のとき』の四部からなっている。『娘時代』は一九六一年六月（原著一九五八年）に出版され、二十歳までの青春時代が回想される。続編『女ざかり』は一九六三年五月（原著一九六〇年）に出版され、サルトルと出会った一九二九年から始まり、スペイン内戦、ナチス台頭、大戦といった試練と闘いながら、サルトルとの間で育まれる愛情と仕事への情

熱が描かれる。『或る戦後』は一九六五年（原著一九六四年）に出版され、朝鮮戦争、アルジェリア独立運動、ド・ゴール政権などについて触れられており、戦後史の証言としても貴重である。完結編『決算のとき』は一九七三〜七四年（原著一九七二年）に出版され、一九六三年以後の著作活動や、日本、中東、東欧などへの旅行、女性解放運動への対応とともに、現代政治・文化の問題にも言及している。

池上玲子は「サルトルら実存主義陣営の生活、文学製作過程を探る二次的資料として参照され」とボーヴォワールの同時代の受容を確認した上で、「実存主義全盛の時代に大学生活を送り、サルトルの『存在と無』で卒論を書いた倉橋が、翻訳刊行前にボーヴォワールの自伝を原文で読んだことを想像するのはそれほど無理ではないだろう」（注六）と「暗い旅」は同時代のボーヴォワールの自伝『女ざかり』を参照していると指摘している。しかし池上は倉橋文学における双子表象がボーヴォワールの自伝から影響を受けていると論じるほかは、具体的にどこを参照しているかについては言及していない。

「暗い旅」における「あなたがた」の関係はボーヴォワールとサルトルの関係と類似している。そしてその背後にボーヴォワールとサルトルの関係と同様な性愛関係や理論的關係が働いているように思われる。本稿では、池上論を踏まえながら、サルトルとボーヴォワールの関係が主に描かれている自伝『女ざかり』に焦点をあて、ボーヴォワールとサルトルの「契約結婚」との関連性を指摘し、また倉橋が性と結婚に関して、どのような観点を提示

しているかを読み解いていく。

## 一、 共犯関係で結ばれたカップル

「共犯関係」はボーヴォワールの自伝において繰り返言及されている。たとえば、「しかしオルガには、彼女と私の関係が、サルトルと私の関係と同じ比重をもっていないことがわかっていった。サルトルと私は彼女の若さを私たちの経験よりも高く評価していた。といつてもやはり彼女の役割は、緊密な共犯関係で結ばれたひと組のおとなに立ち向かう子供でしかなかった」（『女ざかり』上、二四〇頁）といった箇所などがある。

共犯関係とは、ボーヴォワールとサルトルが正式な結婚も同居もしていない点や、お互いの自由な恋愛を認め合い、しかも正直に報告し合うという風変わりな関係を指すと考えられる。ボーヴォワールは「私たちは共同の習慣でお互いを束縛しようというこゝとすら考えていなかった。だから、結婚しようなどとは考えてもみなかったのである。私たちの主義からいってそれは意に反していた。（中略）独身は、だから私たちにとって自然だった」（『女ざかり』上、六八頁）と述べている。サルトルが提案した「契約結婚」は主に「ぼくたちの恋は必然的なものだ。だが、偶然の恋も知る必要があるよ」（『女ざかり』上、一八頁）という事項、および「お互いに嘘をつかないという以外に、互いに隠しだてはしない」（『女ざかり』上、二〇頁）という事項から成り立っていた。

それに対して、「暗い旅」では「けっして結婚しないことを誓い合った共犯者」や「一種の共犯関係としての愛」など、「共犯」という言葉が繰り返して使われる。さらに「あなたがた」は「結婚して子どもを生み家庭をつくる意志をもたないことにかんしては、完全な一致に達して」（四七頁）おり、また「自由に他の男や女をあいすること、ただし完全な了解のうえで、嫉妬なしに……この条件を守るとはあなたがたにとってなによりも必要なことだった」（五一頁）と描かれている。他の異性との関係を認めるのは、二人のあいだにある愛こそ真の愛であると信じ、他の異性との関係を持つことを「セクスの遊戯」とするからである。こういった点において、「あなたがた」の関係とボーヴォワールとサルトルの関係との類似性を見出すことができる。

しかし、「あなたがた」はボーヴォワールとサルトルとは違い、「婚約という関係にくるま」り、周りにそのうち結婚するという錯覚を与え、「犯罪者風の微笑」を浮かべる「共犯者」同士と設定されている。ここで婚約という関係に注目したい。なぜ「世間を詐欺にかけるための擬制」である「この公認された契約関係」即ち婚約関係が必要となってくるのだろうか。

当時の社会状況を確認しておけば、一九五九年は皇太子ご成婚の年であり、この出来事は「軽井沢の恋」というエピソードに裏打ちされて、「幸福な恋愛結婚」という神話的なイメージを一番に拡散することに貢献したのだった。翌一九六〇年二月に皇孫、すなわち浩宮徳仁親王（現皇太子）が誕生し、「ミッチーブーム」が「ナルちゃんブーム」に継承され、「あやかり出産ブーム」にさ

え発展した。そのため、国民あげての恋愛結婚と「望む妊娠」が大きな話題を呼んだ中、一九二五年から増加傾向をたどっていた非婚率が、減少に転じるのが一九六〇年である。

また一九六〇年では、「女性の平均初婚年齢二四、四歳」（注七）とある。「暗い旅」の「あなたがた」が出会ったのは「七年前、十七歳の四月、（中略）高校三年にすすむとき」（三四頁）である。計算すれば、物語が語られる現時点（一九六一年）で「あなたがた」が二四歳になる。「婚約して四年以上になるのに結婚しないでいる」という記述から、「あなたがた」が婚約したのは「あなたがた」が一九歳（一九五六年）の時であると推測される。一九五五年「あなたがた」がQ大学の入学試験で失敗したことを受け、翌年もう一度Q大学を受験するため予備校に通おうとしたとき、母親は「あなたがこれ以上Q大学入学のために時間をかけると婚約を逸する」（八三頁）と行って反対の姿勢を示す。

一八歳を過ぎると、婚約を逸するのではないかと心配された「あなたがた」は、「かれといっしょに生きていくために結婚や家庭を必要としな」（五八頁）いのを最初から分かちついで、母の発言によつて代表される社会慣習から逃れるために、婚約という関係にくるまる必要があったのかもしれない。また「かれの母に会うと、かれとの結婚のことで愚痴っぽい話をきかされるだろう、彼女に悪気があるわけではないにしても……早く孫の顔がみたいなどというだろう」（五四頁）といった記述も、当時の結婚事情を窺わせている。そういった社会状況を盛り込むことによつて、読者に対して語りかけるような書き方にも見える二人称という語りの形

式とともに、当時の読者に一種の親近感を与えているのかもしれない。

## 二二 運命的な出会い

ボーヴォワールは「一九二九年は、私にとって、学生生活の終わり、経済的な解放、親もとからの一本立ち、古い友情の清算とサルトルとの邂逅の年であり、明らかに新時代を開いたのである」（『女ざかり』上、三三四頁）と一九二九年を自分の生涯を区切る重要な年の一つに数えている。ボーヴォワールが男友達に紹介されてサルトルに会ったのは七月のある日曜日のことである。ボーヴォワールは『娘時代』の終末部でその当時の印象を以下のよう語っている。

それに大きな幸運がやって来たのである。（中略）サルトルは、私の十五歳の時の願望にぴったりあてはまっていた。彼はもうひとりの私であり、私のあらゆる熱中を極端にもっていた。（中略）彼とはいつも何でも分け合えた。八月の初め、夏休みに彼と別れた時、私は彼が自分の人生から絶対に去らないということを知っていた。（『娘時代』三二二五頁）

ここでボーヴォワールが述べている一五歳の時の願望は以下のようなものである。

私は自分の未来の夫のイメージにはつきりとした輪郭を描いていなかったが、未来の夫との精神的な関係には、はつきりとした考えを持っていた。私は彼に情熱的な尊敬をもつだろう。この点は他のすべての点と同様、私にとってどうしても必要な事項だったのである。この選ばれた男性は、ザザが私に對したと同様に、一種の明白な事実として私に尊敬の念を起こさせてくれなければならないのである。（中略）いつか、ひとりの男性が、その聡明さにおいて、その教養において、その威信において私を屈服する時、私は愛するだろう。（『娘時代』一三二頁）

この箇所を「暗い旅」と比較すれば、その類似性は明らかである。「暗い旅」において、「このあなたとおなじくらい若い少年こそあなたの愛の共演者にふさわしい」（三五頁）、「するとあなたの共演者はかれ以外になかったのだ、最初の出会いの最初の一瞥でああなたが感知してしまったように」（一〇四頁）と、二人の共生関係があなたも最初から決められていたかのように語られる。最初の出会いの場面においては、当時高校生だった二人が砂浜ではじめて出会い、並んでいる足が「双子みたいに似ている」（三八頁）る。そして外見に留まらず、精神力・想像力や恋愛観という思想次元においても二人は類似している。「かれ」はあなたを嫉妬させるほど、優れた精神力と想像力の持ち主である。双子のように酷似する二人はまるで「競争を競わないために、お互いに似せあつてきた」（一三〇頁）ようである。「あなた」は「か

れ」の存在を「完璧な恋人」「完璧な理解者」そのものと解釈している。完璧な理解者がいるからこそ、「あなた」は安心感と共生感が与えられ、安心できる居場所にたどり着くことができたのである。

ボーヴォワールはサルトルをもう一人の自分と強調しているが、トリル・モイは「確かにボーヴォワールとサルトルはひとつかもしれない。しかしそれは、サルトルが二人を代表している限りにおいてなのであり、「完全な一体化の中身とは、彼が主張すれば彼女は譲歩するということなのだ」(注八)と言うように、ボーヴォワールが主張するサルトルとの一体性神話について、二人の関係を統御しているのはサルトルであるとしている。「暗い旅」において、「あなた」は「かれ」の失踪により、居場所を失い、精神的拠り所とする「かれ」を探し求めて旅に出るが、結局見つからず、精神的支柱を「かれ」から「小説を書く」ことへと移行させ、小説執筆を決意するところで物語が閉じられる。「あなた」は思い出の描写において、至る所、「かれ」を自分より精神性、知性において優れている人物として位置づけるため、一見、「暗い旅」においても同様な一体化関係が働いているように見えるが、「かれ」は文中に一回も登場せず、「あなた」の叙述の中にしか登場しない。即ち、「完璧な理解者」と描かれる「かれ」は「あなた」によって作り出された存在に過ぎない。サルトルとボーヴォワールの関係を、サルトルが統御しているように、「あなたがた」の関係では、「かれ」が指導権を握っているように見えるが、実際には「かれ」が糸で操られる人形に過ぎず、「あなた」こそ、

二人の関係を引っ張っているボスである。

### 三、セックスなしの愛

サルトルの《偶然的な恋》が延々と続く中、嫉妬に身を焦がし、疲れ果てたボーヴォワールはサルトルにセックスの封印を切り出した。それに対して、「暗い旅」の「あなた」は、「愛と快楽のこの形態を長く保つことは困難だった。とすれば、あなたがたは快楽のほうを放棄する以外になかっただろう」(一一二頁)、「かれとあいしあうことはすでに苦痛となっていた、愛していないからではない、愛していたからだ……」(一一一頁)と悟り、かれと相談した結果、二人の間でセックスは停止するという奇妙な関係にたどり着く。それについて、倉橋は「愛と結婚に関する六つの手紙」において、「わたしたち、あの猥褻で神聖な性の儀式に熱中してエロスを使い果たしてしまったわたしたちにとって、セックスなしの愛が、ありうるただひとつの愛の形なのです。わたし自身、性による交わりに愛の完成を求めるといふ錯誤を繰り返したくありません。あれは愛の完成ではなくてそのむなしい崩壊の祭式なのです」(注九)と述べており、セックスはある意味で究極の愛ではあるが、それと同時に単なる道具と化してしまうこともあると指摘している。

ボーヴォワールは『ボーヴォワール対談集1972〜82』において、過去を振り返る形で性と愛との関係について、一二歳の頃、「意味はわからないままに、私は激しい性欲に苛まれて」い

たと告白したうえで、「そのころは私の人生でセックスが愛の対象を持たなかった唯一の時期」（注十）だったと語っている。その頃以外、ボーヴォワールは常にセックスを恋愛に結びつけて行動していたことが分かる。またその点は『女ざかり』におけるカミーユに対する評価にも見ることが出来る。たやすく肉体を扱うカミーユに対して、ボーヴォワールは「感情と肉体はごく自然に彼女に罪があると認め」（六三頁）と、嫌悪感を隠さなかった。

ボーヴォワールは晩年になって、「日曜日にトゥールに行っても、私たちは真昼間からホテルの部屋に入り込む勇氣はなかった」（『女ざかり』上、五五頁）、「トゥール・パリ間の汽車の中で見知らぬ男の手が私の足ののび、私を興奮させ、私はくやしさに転倒した」（『女ざかり』上、五六頁）、「ふり返ると、ひとり浮浪者が藪の中に寝そべり、じつと私を見据えながら自瀆していた。私はびつくりして仰天して逃げ出した」（『女ざかり』上、五七頁）と肉欲とピューリタニズムとの狭間に苦しむ当時の自分を赤裸々に告白している。肉欲とピューリタニズムとに引き裂かれながらも、「自分の愛していない男とベッドに入る……こういう経験を私はしていなかった」（六三頁）と愛とセックスを一つとする考え方が際立っている。

一方、倉橋は「女性講座」において、男性は精神と肉体とを切り離すことができるのに対して、「女性とは精神を肉体からひきはがすことのできない、あるいはそれを苦手とする「性」であるようです。女の場合はその肉体をおしよそぎんちゃくのように生活の場に密着しています」（注十一）と論じている。また「わ

たしの第三の性」において、「性については、これをいわば現金でもっていて自由奔放に処分し享樂するということがあたらしいモラルであるかのような考え方が流行したりするが、ばかげたことである。女の性を、性交をエンジョイすることに還元するのは客体として男に利用される役割をひきうけることにすぎない。あの屈辱な《過失の処理》をおしつけられるのはつねに女であつて男ではない」（注十二）とフリーセックスを批判している。

一見倉橋がボーヴォワールと同じく、愛と性の一致を捉えているように思われるが、しかし、倉橋は初期作品において、愛と性を分離させている女主人公を多く造形している。たとえば、「パルタイ」において、「わたし」が《労働者》と関係を持ったのは、愛情からでなくて、「いつか《労働者》と理解できるかもしれないという希望」に駆られたからと考えられる。そして、「暗い旅」において、倉橋は「あなた」に相手と一度限りのフリーセックスを享受させている。同じ一九六〇年代でありながら、エッセイで述べていることと小説の中で造形していることとの間に、相違が生じるが、それは当時の社会風潮と関わり合っていると考えられる。『日本女性の歴史 性・愛・家庭』では、戦後社会における性について以下のように述べられている。

石坂洋次郎の青春小説『青い山脈』は当時の若い男女の解放的な明るさを伝えている。奔放な若者たちの生體を描く芥川賞受賞作『太陽の季節』が映画化され、「太陽族ブーム」が起きたのと、ロックンロールの歌手、エルビス・プレスリー

が日本でも圧倒的な人気を博したのは五六年である。両者とも“性的”<sup>セクシー</sup>であることが後ろめたさをとまなわないという点で、高度経済成長開始期における若者の意識の変化を示していた。六〇年、『性生活の知恵』（謝国権著）がベストセラーになり、避妊の普及ともあいまって生殖の性と快楽の性の分離がはじまる。以後、愛と性の技術書が続出し、女性雑誌には性情報が氾濫する。（注十三）

「軍国主義の解体、「家」制度の廃止」を「それまで最も抑圧されてきたもの―性と恋愛の解放をもたらす」ものとし、一九四七年の『青い山脈』（石坂洋次郎）、一九五六年映画化され、“太陽族ブーム”を引き起こした『太陽の季節』（石原慎太郎）、一九六〇年ベストセラーとなった『性生活の知恵』（謝国権）を取り上げることによって、戦後社会における若者の意識の変化を示すと同時に、性の自由化と性的自由が進んでいる状況を明らかにしている。また、倉橋が何度もエッセイを載せた『婦人公論』では、一九六〇年九月号に「新しい男女関係」という特集（注十四）が組まれており、そのうちの「終着駅のない三十娘」という手記において、次のような記述が見られる。

初めて会ったときに、あるムードが生まれれば、私は率直にそのムードに酔う。人を知り、お互いに惹かれあうくらい人生に楽しいことはないと思う。美しいといわれれば、それを

お世辞だなどと考えるのは不必要なこと。お互いが相手の言葉に酔えるかどうかで、その恋が楽しくもなりつまらなくもなるのだ。かといって、私はいわゆる男漁りではないつもりだ。訪れる恋のチャンスに率直にしたがうだけだ。

いつも新しい情事に囲まれている私の人生には、退屈するときというものは無い。次々に楽しい遊びを考え、お互いの中が一番美しいもの優しいものをみつめあいながら、そのときそのときを楽しめばいいのだ。（注十五）

いつも新しい情事を楽しむという新しい恋愛のあり方が提示されている。奔放な性の扱い方は当時の社会風潮を窺わせる部分もあると思われる。倉橋が「暗い旅」において、「あなた」に一度限りのフリーセックスを享受させているのは当時の社会状況や流行要素などを取り入れ、セックスを享受するという流行要素を意図的に持たせることによって、ベストセラー（注十六）を狙おうとしていたからであると考えられる。

#### 四、愛と結婚と家庭

一九三二年二月、サルトルとボーヴォワールはそれぞれル・アール、マルセイユ赴任が決まる。そのとき、失望を感じ、精神が不安定な状態に陥ったボーヴォワールに、サルトルは結婚を持ち出した。これが最初で最後の求婚でもある。それに対して、「暗い旅」において、二人の《危険な関係》に限界を感じた彼は、あ



る日「あなた」に「ぼくは飽きてしまった、もつとほかの関係を考えてもいいころだ……」（七三頁）と結婚を申し込んだ。しかし、ボーヴォワールも「あなた」もその提案を受け入れなかった。

「必然の愛」に目覚めたサルトルとボーヴォワールは、主体的に互いに愛しあい、時間の経過と共に互いの愛を深め合いながら、揺るぎない愛の関係を築こうとした。しかし互いにもう一人の自分を見出す「理想的なカップル」はその永遠の愛を結婚から切り離し、結婚しないことを堅持していた。この点において、倉橋はボーヴォワールと同じ考え方を示している。倉橋はエッセイにおいて、「結婚の問題は、なによりも「生活」の問題です。それはかならずしも「愛」を条件としません。あるいは、愛がありさえすればその果実として出てくるというものでもありません。この場合、結婚は愛の死滅のあとにはじまる共同生活であり、ここで必要なものはや愛ではなく、人間としての聡明さと妥協の技術なのです」（注十七）と愛と結婚の関係に対する認識を端的に示している。

ボーヴォワールは、結婚の申し出を拒否した理由について、愛を結婚から切り離すという考え方が働いたことに加えて、「私たちがいわゆる正當な男女関係に入る重要なひとつの動機があるとするれば、それは子供を欲しいという場合だったが、私たちは子供を欲していないかった」（六八頁）と述べたうえで、子供を生まない理由の一つとして、「私は子供たちから無関心、あるいは敵意を予期していた。なぜなら私は家庭生活にたいして激しい嫌悪を抱いたことがあるからである。そんなわけでどんな愛情の幻想も

私を母性に誘うことはできなかった」（六九頁）ことを挙げている。

ボーヴォワールはまた、「私は両親と仲よくはしていたが、両親は私にたいする支配力をすっかり失っていた。またサルトルは全然父親というものを知らず、母親も彼の祖父母も、彼を束縛する掟ではなかった。ある意味において私たちはふたりとも家なしであり、このシチュエーションを自分たちの原則とした」（一三三頁）とも述べている。

それに対して、「あなた」は失踪する「かれ」を探し、最初に出会った鎌倉の海岸で彷徨った時、子どもが犬に怖がり、泣き出す場面を目撃する。「あなた」は「家畜の性器よりも醜悪」に見える顔と表現し嫌悪を示した後、「ああ、あんな子どもなんかたくさんだ、だから……あなたは子どもを生んで育てる結婚というものに近づく気にはなれない……」とボーヴォワールと同じ観点を示す。そして、電車や映画館で泣き出す赤ん坊に遭遇したときの、「そんなこと（そういう場所にけっして赤ん坊を連れて来ないこと―引用者注）よりも生みほしないうちに」（四〇頁）という感慨からも「あなた」の子どもを生まない決心を再確認することができる。

また、「イエ」を訪問するかどうかで迷うとき、「あなたにとつてもかれにとつても、家は帰還すべき巢ではなくつねに脱出すべき檻だったから」という一節がある。「あなた」が常に家からの脱出を謀っているのは、「まるでミイラになった」ように瘠せている母の存在が大きいと考えられる。「彼女のあらゆる動作、

眉の動き、右端をちよつとひきあげて、やさしいがかすれた声をだす唇、それらのなかにあなたは目だたない非難と自虐の針をみいだす」(五八頁)と描かれる母は、父に対して劣等感を持つと同時に、良家の子女らしく行動しない「あなた」と「妹」に裏切りを感じる怨恨の塊である。「あなた」が「浮世絵風の厚化粧」に身を包まれた、「江ノ島の弁天像をおもわせる」悠里子の母の顔に、「老化した悠里子をみた」(四〇頁)のと同じように、「あなた」も良妻賢母思想で武装された母の悲惨な姿に自分の未来を見出したのかもしれない。「あなた」が家庭生活に理想型を見出さなかつたため、家庭を築く意味に悩まされ、家庭を築く自信が持てなかつたのも何らの不思議もない。母親の轍を踏まないように、あえて結婚に踏み出さなかつたのかもしれない。

## 五、書くことの意味

ボーヴォワールはオルガとサルトルとの《トリオ》関係に苦しんだあげく、『招かれた女』の創作に取りかかった。『女ざかり』において、「まず第一にオルガを紙の上で殺すことによって、私は彼女にたいして感じたかもしれない焦燥や悪意を水に流し、私たちのよい思い出に混じっている嫌な思い出を拭い去った。とくに、ピエールにたいする愛によって従属の状態に閉じこめられていたフランソワーズを、犯罪によって解放したことは、私自身の主体性を取り戻させたのである」(『女ざかり』上、三二七頁)とその心情を語っている。それに対して、『暗い旅』において、「あなた」

は「かれ」を探し求めて、京都でさまよつたあげく、「本格的に小説を書きはじめること」を考え始める。

たとえば、あなたは、これまでいつもあなたの精神を構合に似た関係で縛っていたかれの精神から解放されることによつて、本格的に小説を書きはじめることもできるのだ……(一六二頁)

「あなた」は、「かれの精神から解放」され、つまり「かれ」の失踪による裏切りから自立を果たし、小説を書くようになる。「あなた」が小説を書き始めることは偶然ではない。倉橋はエッセイのなかで、女が自我を実現する上での小説を書くことの重要性について、何度も繰り返して述べている。たとえば、倉橋は「青春の始まりと終わり」において、「あの異常に輝かしいくらやみのなかの太陽」と青春を表現したうえで、「わたしにとつて、「青春」の終わりとは小説を書き始めること」(注十八)だったと述べている。「暗い旅」は「あなた」が「共犯者」から離脱し青春を終え、少女から女へと成長する成熟物語と言えよう。

## 【おわりに】

今まで述べてきたように、非婚主義、他の異性との関係、運命的な出会い、一度きりの結婚話、セックスなしの愛、書くことによつて解放されるといった要素を辿っていくと、倉橋の「暗い旅」

に於ける「あなたがた」の関係はボーヴォワールとサルトルとの「契約結婚」を下敷きに行っていることが分かる。しかし、それは表層的な「模倣」に留まらず、性と愛と結婚に対する認識においても、多少の差異はあるものの、「暗い旅」は『女ざかり』から強い影響を受けていると考えられる。二人ともセックスは愛の一つの道具にすぎず、セックスなしの愛こそ究極の愛であると愛のあり方を提示している。また、愛を提唱するが、それは結婚という器に入りきらないものであり、愛を結婚の条件とし、結婚は愛の結果とする考え方に異議を唱えている。そういった点において、「暗い旅」における性と愛と結婚に関する認識は『女ざかり』から受け継がれていることが分かる。

サルトルが提案した「契約結婚」は、サルトルが亡くなる一九八〇年まで五十年間も続いた。ボーヴォワールが、女好きのサルトルの度重なる偶然的な恋に自我を押し殺し、嫉妬や焦燥を耐え忍んだ末に、自由で対等な新しい男女関係を唱える「契約結婚」によってはたして新しい男女関係を作り上げたかどうか、大きな疑問として残される。二人の関係が五十年間も続いたのは、ボーヴォワールの妥協と犠牲が大きな要因の一つに数えられると考えられる。自由と自立を叫ぶボーヴォワールは結局欺瞞に富んだ「契約結婚」に束縛され、サルトルに振り回されるだけだった。倉橋の「暗い旅」においては、「かれ」の失踪により、ボーヴォワールとサルトルの関係を下敷きにした「あなたがた」の関係は終止符を打たれる。二人の関係を終わらせたことは、倉橋がボーヴォワールに送る最大の心遣いであったとも考えられる。倉橋は「契

約結婚」という新しい男女関係に憧れながらも、その限界を感じたのかもしれない。

【付記】本稿は日本比較文学会二〇一四年度秋季九州大会（於・福岡大学、一二月六日）における口頭発表を基に加筆・修正したものである。

#### 【注記】

注一 江藤淳「海外文学とその模造品―ビュートルと倉橋由美子の関係」『東京新聞』一九六一年二月九日 八頁

注二 「わたしの小説作法」（初出「私の小説作法」『ことば』という音 即興演奏家のように）『毎日新聞』一九六五年四月一八日）において、「わたしがこれまでに書いた、また書こうとしてきた小説は大きくわけて二つのタイプになるようです。ひとつは幻の城をつくって世界の意味に形をあたえるもの、いまひとつは「わたし」のなかをほりぬいていくもの。第一のタイプでは、しばしばKやLという記号であらわされる人物を登場させます（それでわたしはこれをK—L型の小説と名づけています）。かれらは独立変数であって、わたしの定めた仮説的状況のなかで動きまわり、わたしはかれらの行動を観察し記述します」とある。（『倉橋由美子全集』わたしのなかのかれへ』講談社 一九七〇年四月 一九三頁）  
齊藤金司「倉橋由美子論―『暗い旅』を中心として―」

『主潮』一卷 一九七三年一月 三〇頁

注四

倉橋由美子「作品ノート5」『倉橋由美子全作品3 暗い旅・真夜中の太陽』新潮社 一九七五年二月 二三九頁。また「そのうちに、「暗い旅」を評するときには、ピュートルのLA MONDIFICATIONに似ているが、と断ってからその少女小説ぶりに文句を付けるのが定石となった。それでもこれが少女小説だと断じた批評はついに現れなかったようである」(同書三二二頁)といった言及もある。

注五

本稿における「暗い旅」「娘時代」「女ざかり」の引用はそれぞれ『倉橋由美子全作品3 暗い旅・真夜中の太陽』(新潮社 一九七五年二月)、『娘時代 ある女の回想』(ポークヴォワール著 朝吹登水子訳 紀伊国屋書店 一九六一年六月)、『女ざかり ―ある女の回想―』上・下巻(ポークヴォワール著 朝吹登水子・二宮フサ訳 紀伊国屋書店 一九六三年五月)によるものである。

注六

池上は「傍証として、白井浩司「最近のフランス出版界」(『朝日新聞』一九六一年二月二日)において、「ポークヴォワール女史の回想録『働きざかり』(『女ざかり』は邦訳が出版される前までは『働きざかり』と訳されていた)がフランス本国において「最近数ヶ月連続してベストテンにはい」っているとの紹介があること、(中略)『婦人公論』(一九六一・六)掲載の手記において翻訳を仕事とする主婦が「働きざかり」を読んだとの記述があるこ

となどから、倉橋が自伝を読んでいた可能性は少なくない(池上玲子「わたし」と「わたし」、鏡像関係への欲

望 ―倉橋由美子1960年代―『語文』一二八輯 二〇〇七年六月 四七頁)と述べている。

〇〇七年六月 四七頁)と述べている。

注七

「女と男の時空」編集会『年表・女と男の日本史』藤原書店 一九九八年一〇月 三一七頁

注八

トリル・モイ『ポークヴォワール 女性知識人の誕生』大橋洋一・片山亜紀・近藤弘幸・坂本美枝・坂野由紀子・森岡実穂・和田唯訳 平凡社 二〇〇三年八月

注九

倉橋由美子「愛と結婚に関する六つの手紙」(第四の手紙―Kに、一九六一年二月三日)(初出は丹羽文雄編『結婚論―愛と性と契―』婦人画報社 一九六二年七月)『わたしのなかのかれへ』講談社 一九七〇年四月 八七頁

注十

アリス・シュヴァルツァー『ポークヴォワール対談集1972〜82 第二の性 その後』福井美津子訳 青山館 一九八五年六月 一一二〜一一三頁

注十一

倉橋由美子「女性講座」(初出『ヤングレディーズ』、一九六一年一月二五日〜一九六二年二月二五日)『わたしのなかのかれへ』講談社 一九七〇年四月 六一頁

注十二

倉橋由美子「わたしの『第三の性』」(初出『中央公論』75(8)、一九六〇年八月)『わたしのなかのかれへ』講談社 一九七〇年四月 二九頁

注十三

総合女性史研究会編『日本女性の歴史 性・愛・家族』角川選書 一九九二年三月 二四二頁

注十四 結婚した夫婦が別れ住んで初めて満ち足りた夫と妻にな

ったという「別居生活の愛憎」、もはや結婚などという  
「安息」は不必要だと叫ぶ「終着駅のない三十娘」、愛  
する女を所有物として「妻」と呼ぶことはできない「入  
籍拒否の夫婦関係」などが紹介されている。

注十五 『婦人公論』五二六号 一九六〇年九月 一三四頁

注十六 倉橋は作品ノートにおいて、「第二の『挽歌』（東都書房

で出した原田康子のベストセラー―引用者注）を書く能  
力がないことにかけては私などその筆頭であることは自  
分が一番よく知っていたが、このT氏（東都書房の編集  
者―引用者注）の余りの熱心さに感染して、こちらも山  
師か「呼び屋」のような気分になり、ベストセラーを狙  
って長篇少女小説を書くことにした」（二三九頁）とベス  
トセラーを狙っている心情を語っている。

注十七 前掲注九「愛と結婚に関する六つの手紙」七六―七七頁

注十八 倉橋由美子「青春の始まりと終わり―カミュ『異邦人』

とカフカ『審判』―」（初出『高校生新書47 私の人生  
を決めた一冊の本』（三二書房）一九六六年四月）『わた  
しのなかのかれへ』講談社 一九七〇年四月 二六〇頁